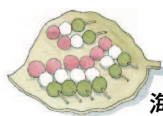


## 「バイオテクノロジー国際交流棟」と 生物学国際交流センター



海外交流

藤山和仁\*

Inauguration of the International Center for Biotechnology building as part of the  
“International Research Complex for Biotechnology”

Key Words : International, Biotechnology, human resources

大阪大学吹田キャンパスに「バイオテクノロジー国際交流棟」が完成しました。

### 生物学国際交流センターの概要

生物学国際交流センターは、学内共同教育施設です。バイオテクノロジー分野で国際的視野に立った教育と研究を行い、タイ王国・マヒドン大学内に設立した生物学国際交流センター・東南アジア共同研究拠点 (CRS、約 500 m<sup>2</sup>) とともに周辺諸国との学術交流を推進し、アジアでのバイオテクノロジーの研究となるハブとなることを目指しています。

### 生物学国際交流センター新棟竣工までの経緯

生物学国際交流センターは、1978年に大阪大学工学部附属微生物工学国際交流センターとして設置されました。1977年の学術審議会により建議された「発展途上国との学術交流の推進について」の趣旨に従い、微生物工学に関する東南アジア諸国との学術交流を実施するためです。その後、1981年に微生物工学国際交流センターの教育・研究・国際交流の拠点として面積が約 1000 m<sup>2</sup>の建物 (4階建て) が建設され、研究室として一講座体制で開始しました。1985年には、大阪大学工学部附属微生物工学国際交流センターが廃止され、大阪大学工学部附属生物学国際交流センターとなり、1995年には大

阪大学工学部附属生物学国際交流センターが廃止されて、学内共同利用教育研究施設として大阪大学生物学国際交流センター (二つの研究部門体制) となり、現在に到っています。しかし、外国人客員教授室、講義 (セミナー) 室、外国人研究者の受入れ業務の中心となる事務室が必要な生物学国際交流センターの建物は、二研究部門 (約 50 人の教員・学生) の教育・研究の現場としては狭く、また希望が増え続けていた ASEAN からの研究者や学生の受入れに支障が出始めました。さらに、2007年に耐震強化を兼ねた改装された応用生物工学科建物 (C2・C3棟) と比べても、老朽化が目立ち始めました。身障者対応の施設整備、トイレの改装、廊下などの壁の塗り替えなどで対応してきましたが、やはり狭隘な状態は解決されませんでした。文部科学省へ概算要求により改修・改築の要望をしておりましたが、原島俊教授 (応用生物工学科) が生物学国際交流センター長の時代に大阪大学施設部のご助言もも入れ、概算要求を強く希望しました。その結果、2011年初めに「バイオテクノロジー国際交流拠点」として新棟 (約 3000 m<sup>2</sup>) の建設と旧棟の改築の認可をいただきました。しかし、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震が発生し、予算上の問題で着工の許可がおりませんでした。大変心配しましたが、2012年に着工が許され、何度も施設部や設計事務所の方々と議論し、我々生物学国際交流センター教職員の希望も取り入れられた設計図が出来上がりました。特に、建物北側にある桜の木を残したい、日本人学生・留学生、学生・オープンラボの研究者が自由にディスカッションできるような場所を設けて新しいアイデアを創出できる環境を作りたい、などの思いを汲んでいただきました。工事は2012年初夏より始まり、まず北側の大木が切り倒され、丘が削られていきました。2012年10月からは新棟の



\* Kazuhito FUJIYAMA

1961年8月生  
大阪大学工学研究科博士前期課程修了  
(1985年)  
現在、大阪大学 生物学国際交流センター 教授 工学博士 糖鎖工学  
TEL : 06-6879-7455  
FAX : 06-6879-7454  
E-mail : fujiyama@icb.osaka-u.ac.jp

建築のため、また旧棟の改装のため本格的な工事が始まりましたので、2013年5月までの間、センターの教職員・学生、研究室は工学研究科のいくつかの建物・施設をお借りして分散し、教育・研究・国際交流の業務を継続しました。ついに5月建物の新棟が完成し、旧棟の改築が完了しました。

### 生物工学国際交流センター新棟と事業

2013年5月20日より、生物工学国際交流センターは新棟（ $\alpha$ 棟）で教育・研究業務を行なっております。新棟を $\alpha$ 棟、旧棟を $\beta$ 棟、新棟と旧棟をまとめて「バイオテクノロジー国際交流棟」として呼ばれることとなります。バイオテクノロジー国際交流棟には、工学研究科と生物工学国際交流センターが入居しております。

生物工学国際交流センターは、先述のようにタイ王国・マヒドン大学理学部内に、東南アジア共同研究拠点（CRS）を設けました。今回新棟には、外国の大学がその研究拠点を阪大内に設置できるように「外国大学拠点事務室」を設けました。ここを軸にして新しい国際交流の姿が形成されるものと思っております。「高度研修室」は、留学生やユネスコ研修生、外国人研究者短期研修などの、学生実験や技術研修の場として活用する予定です。また、「客員教授室」を独立して3室設けました。外国からの客

員教授・研究員の方が長期滞在し、生物工学国際交流センター研究室との共同研究や、「多目的室」を使った各自の研究室を契約期間内で立ち上げることも可能となります。研究室は、実験室（ラボ）エリアとデスクエリアを分けました。

このような新棟で教育と研究ができるようになりました。生物工学国際交流センターは、文部科学省、UNESCO・ジャカルタ事務所のご支援の下、2012年より新しい国際大学院プログラム UNESCO Biotechnology School in Asia を開始しました。これは、過去約35年間にわたり醗酵工学科（当時、現在応用生物工学科）と協働してユネスコ微生物大学院研修講座（1973年から2003年まで、30期）とユネスコバイオテクノロジー国際大学院研修講座（2005年から2008年まで、3期）を開講し、459人の修了生を送り出した実績に基づきます。過去のユネスコ大学院研修講座では修了証が出るだけでしたが、Biotechnology Schoolでは修士号を在籍大学で出せるようなシステムに変えました。また、日本学術振興会（JSPS）の支援を得て、東南アジア諸国の豊富な農林産資源の持続的利用を中心課題とした研究（アジア研究教育拠点事業 Asian CORE Program）を遂行しています。最近では、留学生が大学・大学院を修了後、日本企業、あるいは日本企業の現地関連会社で就職するケースが増えてきています。阪大で



バイオテクノロジー国際交流棟（ $\alpha$ 棟、 $\beta$ 棟）  
生物工学国際交流センターは、 $\alpha$ 棟の3～5階に位置します。  
 $\beta$ 棟は、旧棟です。

バイオテクノロジーの教育を受け、知日派の学生が ASEAN の学界、産業界で活躍できるような人材育成にも取り組んでいます。産業界のみなさま、是非応援下さい。

2013 年は、「日・ASEAN 友好協力 40 周年」にあたります。阪大におけるバイオテクノロジーでは、1973 年にユネスコ微生物大学院研修講座が開始し

ております。「日・ASEAN 友好協力 40 周年」と同じです。この節目の年にバイオテクノロジーにおける教育・研究・国際交流の活動拠点が整備されました。今後アジア、特に東南アジア諸国 (ASEAN) の有力大学・研究機関の研究者と協力し、さらに教育・研究事業を発展させていきたいと思っております。

